

プラウトゥス『メナエクス兄弟』——束縛からの解放——

岩崎 務

I はじめに⁽¹⁾

プラウトゥスの喜劇『メナエクス兄弟』では、人が束縛されたり、拘束されたりすることを述べる言葉、および、そのような事態がきわめて多く見られる。第1幕で最初に登場する人物、ペニクルスがまず舞台上で話すことは、奴隷や捕虜をいかにして逃げないように縛っておくかであり、食客らしく「食べ物や飲み物で縛っておくのがいい」(88)と主張する。また、第2幕で、主人のメナエクスB⁽²⁾とともにエピダムヌスに到着した奴隷のメッセニオは、帰国を促す自分の忠告を受け入れない主人の横柄な態度に、「自分が奴隷であることを思い知らされる」(251)と独白し、さらに、主人にエピダムヌスの商売女たちには用心するよう釘をさし、異国人は虜にされて金を巻き上げられると警告している(343)。第4幕第2場では、広場から戻ってきたメナエクスA⁽³⁾が、「何と馬鹿げた、厄介でたいそうな習慣に僕たちは縛られているんだ」(571-2)と言うなり、クリエンス(庇護民)の訴訟沙汰に巻き込まれて弁護をしなければならず、たいそう時間を無駄にしてしまったことを散々に嘆く。第5幕第2場では、メナエクスAの妻である娘から呼び出された老人が登場する。夫の浮気を非難する娘に対して、老人はすぐには娘に同調せず、娘が夫を思いどおりにしようと始終監視しているのではないかと疑い、「お前は夫は自分に隷従するものだとでも思っているのか」(795-6)と逆に論ずるのである。妻が自分の外出に目を光らし、常に見張っていることについては、すでに第1幕でも、メナエクスAが妻を罵る言葉の中で口にしてしている(114-8)。

これら束縛や隷従に関する登場人物の言葉はほかにも多く見られるが⁽⁴⁾、舞台上では、人間の捕捉と見なされるような事態も出現する。たとえば、第2幕の終わりでは、メナエクスBが遊女エロティウムの誘いに乗って彼女の家に入っていかうとするのがメッセニオの目にはそのように映る。メナエクスAについては、広場で習慣と義務に縛られて厄介事に時間を費やした末に戻ってきて、エロティウムの家によく入ろうとするところを、妻とペニクルスに待ち伏せされ、網にかかってしまい、彼自身は知らぬ間のメナエクスBの行動ゆえに、2人からとつちめられることになる。そして、まさに拘束されようとする

る事態が生じるのが第5幕第7場で、やはりメナエクスBとの取り違えから老人によって狂人扱いされたメナエクスAは、老人の連れてきた奴隷たちによって、暴力的に捕らえられ、さらわれようとする。居あわせたメッセニオが救出しようと奮闘してくれるおかげで、大立ち回りの末、どうにかメナエクスAは誘拐されずに助かる。

この劇ではこのように束縛という行為や、それについての言及が繰り返されるが、一方、終幕においては束縛からの解放という事態が続いている。上に述べた誘拐騒ぎでメナエクスAを救ったメッセニオは、この手柄に対する報いとして奴隷の身分からの解放を願う。主人と間違えられているメナエクスAは、自分にその権限があるのか合点がいかないながらも承諾する。のちに2人のメナエクスの対面と認知の場面になって、メッセニオは正式に自分の主人メナエクスBによって解放してもらう(1148)。さらに今度は、兄弟と再会を果たしたメナエクスAは、兄弟の誘いに応じてエピダムヌスを捨てて、生まれた国へ旅立とうとする。家も何もかも売り払ってしまうとまで宣言し、メナエクス家の競売を呼びかけるメッセニオの声で劇は閉じられる。メナエクスAも自分を縛ってきた家や妻からも言わば解放されることになるのである。実は、メナエクスAはすでにこれ以前に締め出しという形で、望まないながら家からは「解放」されていた。妻のマントをこっそり持ち出してエロティウムに与えていたことをペニクルスに密告されたために、彼は怒った妻によって家から閉め出されていたのである(662)。おまけに、やはり双子の取り違えのあおりでエロティウムをも怒らせることになり、彼女の家からも閉め出しを食らうことになり(698)、どの家にも居場所を失っていた。他方では、メナエクスAの不義を知らせた働きに褒美を期待したペニクルスであったが、何も得るものはなく無駄骨に終わってしまい、結局彼もメナエクスAの家とのつながりを失ってしまう(667)。

『メナエクス兄弟』は、双子の兄弟と接するさまざまな人物たちが、それと知らずに同じひとりのメナエクスであると思いつむことで、連続して取り違えが起こり、この取り違えを軸として事件が展開し、滑稽な錯綜した状況が生み出されていく劇であり、最後に兄弟が直接に出会うことで事情が明らかになり、認知という結末に至る。しかし、ここまで述べてきたように、束縛と拘束、そしてそこからの離脱あるいは解放のモチーフが全篇にわたって見られ、この劇を貫く構成要素となっているようである。以下において、このモチーフの劇への組み込みと扱われ方、そしてそこに見出せるプラウトゥスの意図を改

めて考えてみたい。

II ペニクルスの失敗とメッセニオの成功

束縛と解放という点では、食客のペニクルスは、むしろメナエクスAが家の外に解放されることを助ける者のように思われるかもしれない。第1幕第1場で、家から出てきたメナエクスAに会った食客は、旦那が今日はエロティウムの家で豪華な酒宴を催して憂さを晴らすつもりであり、自分もそのお相伴に与れると聞いて、確かに大いに喜び、旦那をおだててその手伝いをしている。しかし、基本的には、食客にとって旦那が自分の家において食事をしてくれるほうが有り難いのであり、そのほうが安定して酒食にありつけるのである。そのことをペニクルス自身が家に縛られるという言い方⁵⁾で表現している。

おれはこの家の虜なんだ。自分からすすんで縛られに行くのさ。(97)

したがって、妻と喧嘩して家を出るメナエクスAを見たときには、「あの人が外で食事をすりゃ、罰を食らうのは奥さんじゃなく、おれなんだから」(126)と言っているし、妻と喧嘩して家の中に落ちていられないメナエクスAに対しては、むしろ無暗に従わないように用心している(151)。そして、広場に行くと言い出した旦那について来いと言われたペニクルスは、「もちろん私はしっかり見張って、あなたについて行きますよ」(216)と応じて、家の中の旦那の妻に代わるかのように、監視役を務めることになるのである。これらの食客の言動を見れば、彼がメナエクスAを家から解放しようとするよりも、むしろ、家に縛られることを促す存在であり、そしてそれに伴って、自らも家に縛られたがっている人物であるということがわかる。

一方、もうひとりのメナエクスBのお目付け役を務めるのは奴隷のメッセニオである。長旅を続けて旅費も乏しくなり国へ帰りたいメッセニオは、エピソードムスという町の危険を説いて、賢明な忠告をして主人の手綱をしめようとする。しかし、最初にも述べたように、メナエクスBに一蹴されて口出しを封じられる。さらには、料理係のキュリンドルスやエロティウムに出会って、案の定、何か抑制を解かれて、警戒心を失っていくかのように見える主人に対して⁶⁾、エロティウムの家に入るのを止めようとするが、それもならず、「旦那がおれを買ったのは、自分の言うことをきかせるため、命令されるためじゃ

ない」(444)と、またもや自分の奴隷の立場を思い知らされる。

またメッセニオは、エピダムヌスの遊女たちが客を獲得するやり方を捕縛として言い表している。というのは、エロティウムの家を海賊船と喩え(344)、メナエクスBが彼女の家に入っていくときには、実際の状況はどうあれ、「海賊船が小舟を引きずりさらちまった」(442)と評している⁽⁷⁾。メッセニオにとっては、主人はまんまと悪だくみをする連中の罠にかかり、誘拐されてしまったのである。そして、主人の命じたとおり、のちに第5幕第6場で主人を迎えに再び舞台に現れるが、今度は実際に主人が男たちによって捕獲され、誘拐されようとする場面を目撃することになる。もっとも、メナエクスAを主人と見間違えているわけであるが、周囲に叫び声をあげ、身を挺して主人を救おうとする。

何たる乱暴。何たる非道。エピダムヌスの方々、私の主人が静かな町中で
白昼、公道で引っさらわれるんだよ。れっきとした自由人としてここに訪
れたのに。(1004-5)

拘束を受ける自分のような奴隷ではない、自由人の主人が力づくでさらわれる非道をメッセニオは訴えている。これより先、遊女の虜にされそうに見えたメナエクスBは、人間違いをされていることを利用して、エロティウムのところでたっぷりいい目をしたうえ、マントや腕輪という戦利品まで得て遊女の家から足早に去っていった(551-2)。今ここでは、メナエクスBが妻とその父親によって自分と取り間違えられたために狂人扱いされることになり、誘拐されかけたメナエクスAが、メッセニオの活躍によって難を逃れることができた。

自由人であるペニクルスの行為と奴隷のメッセニオの行為を比較してみると、対照的な関係をなしていることがわかる。メナエクスAの家に縛られたいペニクルスは、主人を見張ろうとするが、結局それに失敗し、酒食を楽しむチャンスを失って、メナエクスAの家との関係も断ち切られる。それに対して、奴隷という縛られた状態を嘆くメッセニオは、主人(と取り違えたメナエクスA)を拘束から救うことによって、自分自身も奴隷の身分から解放されることになる。そして、メナエクスAは、このペニクルスの失敗とメッセニオの成功を経ることによって家とエピダムヌスから離れ、言わば解放されることになる。メナエクスAが老人の指図で男たちに誘拐されようとした場面は、「れ

つきとした自由人」の息子であった彼が7歳のときに「白昼」誘拐されて、エピダムヌスへ連れ去られたことの再現という意味をもつのではないだろうか。今度は、誘拐は阻止されたのである。

III ローマ的状况

『メナエクス兄弟』についてはギリシアの原作が存在したかどうかは定かではない。しかし、メナエクスAとペニクルスが登場する発端部、メナエクスBとメッセニオが到着してからの取り違えの連続、ペニクルスの密告による事件の転回、メナエクスAの妻の父が登場してからの事件解明へ向かう展開、そして、最後の2人のメナエクスの認知というように、起承転結をもった整った構成が原型として見えることなどから、原作に拠って作られたと考えることができる⁽⁸⁾。上で述べた、ペニクルスの行為とメッセニオの行為のシメトリカルな対置なども、原作においても工夫されていたと考えてよいかもしれない。

このような劇構成の中で、すでに述べてきたように、束縛や拘束のモチーフが目立って多く用いられている。ペニクルスが望み、一方、メッセニオがそれに対する警戒を示していた⁽⁹⁾のは、ご馳走や酒、あるいは愛欲が人間を縛ることである。すなわち、快樂に対する欲望はいつも人間を捕らえて離さないということであり、これは人間の誰もが受けやすい束縛である。メナエクスAは、妻に監視される家を出て、愛人の家での贅沢三昧を楽しもうとするが、一つの束縛から別の束縛へと移行しようとしただけでも言える。真の解放がメナエクスAを待っているわけではなく、迎えるエロティウムが彼をもてなすのは、あくまで「この心地よさは恋する者には災いだけど、私たちにはもうけなんだから」(356)なのである。兄弟のメナエクスBも、結果的には取り違えによってひとり得をすることになるとは言え、物欲や快樂に釣られて結局はエロティウムの家に引きずり込まれていったのである⁽¹⁰⁾。エピダムヌスに着いてからも主人に忠告を与え、その後メナエクスAを窮地から救い出し、メナエクス兄弟が対面した最後の場面では2人を尋問して確かに兄弟であることを明らかにするメッセニオは、この劇では唯一平常心を保って賢明な行動をしている人物と言っているが、この欲望の縛りについても、「思慮分別のある奴隷は、喉よりも背中を、腹よりも足を優先すべきである」(970-1)と、やはりペニクルスとは対照的な言葉を述べている⁽¹¹⁾。

プラウトゥスは、原作の均整のとれた構成を損なっても、劇にローマ人の好んだ笑劇的な要素や、ギリシアという舞台設定に反するローマの要素を持ち込むということをしばしば行っている。この劇においてもそれは見られ、そしてそこでも束縛のモチーフが顕著である。ローマの社会制度に関する話であり、劇の進行を滞らせる長い独白となっているのが、第3幕第1場のペニクルスのセリフと、第4幕第2場冒頭の本ナエクスAのセリフである。ともに広場から戻ってきて、集会や裁判がいかに人間を縛るものであるかについて不平を述べている⁽¹²⁾。ペニクルスは、見張っていた本ナエクスAを広場で見失って食事のチャンスを失い、こう嘆く。

ああどうか神様が、集会を開くことなんかはじめて考えついた奴を滅ぼして下さるように。集会なんか忙しい人間を忙しい目にあわせるだけのものさ。(451 - 2)

集会にいそむることなどは、「日に一度しか食事をしない連中」(457)がやるべきことだとも言い、食事に縛られたいペニクルスには、食事に縛られずに集会に縛られている者たちの気がしれない。一方、本ナエクスAのほうは、いっそうローマ的な慣習であるクリエンテラについて愚痴を言うのであり、ひとりのクリエンスの訴訟沙汰に巻き込まれ、弁護のために時間を浪費したことを後悔している。

神様がみなであの男を滅ぼして下さいますように。奴は僕のこの一日を台無しにしやがった。それから僕も滅ぼして下さい。今日広場を見に行ったのはこの僕なんですから。(596 - 7)

こちら本ペニクルスの言葉に対応するように神様に祈願する言葉で、クリエンスと自分自身をも呪詛している。本ナエクスAのような家長はもちろん家の構成員を支配する立場であり、奴隷はもちろん、妻や子供をもその力で縛っているし、食客やあるいはクリエンスにも支配を及ぼしている。しかし、そのような権力をもつ家長も決して自由ではなく、社会の仕組みに組み込まれているのであり、さまざまな習慣や制度、そして人間関係に縛られているのである。ここでは、奴隷だけではなく、裕福な自由人であっても、ローマ社会に生きる人間として拘束を受けていることが強調されている。

家長は妻を支配していると述べたが、これもローマ的な持参金付きの妻 (uxor dotata) については必ずしもそうではない。持参金という財産をもった妻は、家の中では夫に対して口やかましく、むしろ支配的な立場さえ占める。この劇でもその点がいへん目立っていて、第1幕で妻と喧嘩して家から出てくるメナエクスAは、家の中に向かって言葉を投げつける。

僕が外へ出ようとするたびに、お前は僕を引きとめ、呼び戻し、こう尋ねるんだ。「どこへ行くの」、「何の用なの」、「どんなお仕事なの」、「何の目的で行くの」、「何をもって行くの」、「外で何をしてきたの」。税関の役人を妻にしたようなものだ。(114-7)

夫は妻の監視の目に常に曝され、行動を制限されている。通例、喜劇では、父と息子のように、老人と若者が対立し、若者は老人の権力によって支配されていて、彼自身は何の力ももたず、ひとりでは老人に対抗できない。『メナエクス兄弟』はその点例外であり、若者であるメナエクスAは、父親にあたる者が現在なく、裕福な家の主人として一応は拘束されない、自由に振る舞える立場にある。エロティウムとの関係も、若者の成就しがたい恋というよりも、むしろ、老人が妻の目を盗んで楽しもうとする浮気と似ている。したがって、この劇における老人であるメナエクスAの義父は、むしろ娘に見張られている婿に同情するようなことを述べている。

以上に見てきたように、プラウトゥスが原作をローマ化したり、ローマ的要素が強い場面として原作に加えたりしているところでも、人間が受けている束縛が強調されているようである。とりわけ、食欲や愛欲といった人間一般を捕らえるもののほかに、ローマ社会に生きている人間の状況の反映がそこには認められる。喜劇の通例とは異なって、若者メナエクスAが得ているような、自由人で家の主人という地位にある人間も、決して一方的に支配する側にいるわけではない。広場が象徴するようなローマの公的空間においては、慣習や制度が求めるさまざまな義務に縛られることになるし、家という私的空間においても、力を増した妻の存在が主人の思いどおりにはさせない。そして、自分の支配下にあるはずの妻子や、食客や、クリエンスや、奴隷によって、主人のほう、実際には、見張られたり、足止めを食らわされたり、縛られたりする場合もしばしばあるのである。

やはりプラウトゥスの演出が色濃く表れているのが、メナエクスAが男た

ちによって拉致されようとする場面であった。この場面は、暴力的な場面を見たがるローマの観客の好み⁽¹³⁾に応じた演出が講じられていて、恐らく多数の人間が激しく動くたいへん騒々しい舞台になっていたと想像できる。観客の目を引きつけた大立ち回りによって視覚化されていたのは、まさに、自由人の家長が公道で奴隷たちによって拘束されるという逆転の事態であった。

IV プラウトゥスの意図

プラウトゥスによる改変や付加がなされていると思われる、とくにローマ化された場面においても、人の束縛された状態が登場人物の言動によっていっそう強調されていた。喜劇の登場人物はかなり典型的で、どの作品にもたいてい若者や奴隷や遊女など、支配や拘束を受けている者が登場するので、当然ながら束縛というモチーフがしばしば表れる。しかし、この劇ではとくにそれが全体にわたって目立つように思われ、そのような作り方には作者の意図も見出せるのではないだろうか。最後に、このことについて考えてみたい。

この劇が他の喜劇と比べて異例なところとして、離婚が劇の結末になっているということがある。一般的にローマ喜劇では、若者がある女性に恋をするが、親の意向や、金銭問題や、相手の身分など、何かの障害があつてうまくいかない。しかし、奴隷などのたくらみによって障害が解消して恋が成就し、晴れて結婚というハッピーエンドに至るといったプロットが多く見られる。ところが、この劇では、妻をもっている若者メナエクスAは、家とともに妻を捨て、エピダムヌスからも去っていくという結末になっている。確かに、すでに述べたように、メナエクスAは若者ではあるが、経済的にも自立した一家の主人である。妻がありながら愛人を囲っているという行いからは、むしろ喜劇の老人に当てはまる面をもち、他の劇の恋する若者とは異なるところがある。したがって結末も異なって不思議はないという見方もできる。しかし、老いた家長が若い女奴隷を愛人にしようと画策して妻に見破られ、こっぴどくお灸をすえられる『カシナ』のような劇でも、終幕部においては、妻は鷹揚な態度を見せて夫を赦すのであり、結婚生活は続けられることになる⁽¹⁴⁾。『メナエクス兄弟』は喜劇に一般的なハッピーエンドの終わり方をしていないと言える。

まず、メナエクスAがエピダムヌスへ連れて来られてからどのように扱われたかであるが、彼をさらってきたエピダムヌスの商人について、前口上は次のように説明している。

金持ちではあったんですが、子供はありませんでした。男はさらってきた子を自分の養子にし、持参金付きの妻を見つけてやり、世を去るときにはその子を跡取りにしたんです。(59 - 62)

そしてその結果、「大した財産があの子のものになりました」(67)。誘拐の経緯とエピダムヌスに来てからのメナエクスAの境遇については、劇中でもこれ以上のことは言われない。これだけの情報からすれば、商人は誘拐という紛れもない罪を犯したものの、跡継ぎのいない身としてさらった子にはよくしてやったという印象も生まれる。メナエクスAも、ろうるさいながらも財産のある娘と結婚し、義父はいるものの誰に指図されるということのない家長として、今は裕福で恵まれた境遇にあると見える。したがって、妻と離婚して現在の地位を捨てるというメナエクスAの行動は、必ずしも納得がいかないところがあり、すなわち、このような終わり方は観客にとって喜びのフィナーレとなりきらない可能性がある。

この劇がメナエクスAをエピダムヌスから去らせることで喜劇的な楽しい終幕を迎えるためには、メナエクスAが富や家長の地位を失っても、それに勝るものを手に入れなければならない。それは自由の身に解放されるということであり、メッセニオが奴隷の身分から解放されるのに重ねて、自由人のメナエクスAが束縛から解放されて本当に自由になるということが明確にならなければならない。そのために、プラウトゥスは登場人物たちの言葉や行為によってさまざまに束縛と拘束が表現されるようにすることによって、とりわけメナエクスAの囚われの状態を強調し、また、エピダムヌスを、人を捕らえる土地として強く性格づけたのではなかろうか。

誘拐されて見知らぬ他国で育てられるというのは何と言っても不幸な身の上に違いなく、リアリズムをより重んじるギリシアの原作においては、エピダムヌスに連れて来られてからのメナエクスAについて、商人の跡継ぎとされるまでの、あるいは、跡継ぎとされてからの彼の状態が、やはり拘束を受けた不幸なものであったことが、どこかで十分に説明されていたのかもしれない⁽¹⁵⁾。そのため、兄弟と再会した機会に妻と別れてエピダムヌスから去っていくという結末は、主人公が拘束から解放されてついに自由を享受すると観客には受け取られ、喜劇の終幕にふさわしい気分を与えるものであったと想像できる。しかし、プラウトゥスは、エピダムヌスに来てからのメナエクスAの経験と生

活という劇の背景についての具体的な説明はむしろ抑えて、代わりに、彼の拘束された状況というものを、あるいは、一般に人間を縛っているものを、あくまでも舞台上の人物たちの言葉と行動によって表現されるようにしている。舞台上で現に演じられるという仕方では表されているのである。そして、すでに見たように、プラウトゥスによってローマ化された場面において拘束状況についての表現が著しい。ローマ人は、奴隷ではなく自由人で、しかも家長であっても、日常においてさまざまに束縛されている。家の中においても、外の社会においてもそうであるし、また、一般には自分の支配下にあると考えられる者たちからも、時によっては手枷足枷をかけられることにもなる。この劇で演じられる拘束された人の姿は、ローマ社会に生きる者の暮らしの実相を映している。したがって、『メナエクス兄弟』の結末は、幼くして誘拐されて異国の地に哀れにも囚われ人となった男の救出と解放というよりも、束縛の網がめぐらされている日常からの脱出という意味のほうが強いように思われる。

注

(1) 以下、『メナエクス兄弟』のテキストは Lindsay, W. M. (ed.), *T. Macci Plauti Comoediae*, Oxford, 1904, rep. 1910 に拠っており、引用した邦訳は、拙訳、『ローマ喜劇集 2』所収、京都大学学術出版会、2001 に拠る。

(2) シュラクサエから双子の兄弟を探しにやって来たメナエクス。

(3) 幼いときにさらわれてエピダムヌスに暮らしているメナエクス。

(4) 以下、本論でも示すが、97, 122-3, 216, 342-3, 442-4, 668-71, 698, 766-7, 789-91, 845-6, 1004-5, 1040-1, 1059, 1101 など。

(5) 「家の虜」と訳しているところは、原語は *iudicatus*。判決債務者の意で、借金の返済をしなかった者は、返済するまで鎖につながれ拘束された。

(6) メナエクス B は、エピダムヌスの町で何度も見知らぬ人間から自分の名前を呼ばれて取り違えをされるのに、この地に双子の兄弟がいることに思い至らないのはリアルではないとして、この劇の欠点としてしばしば問題にされる。

(7) 獲物を捕らえる「海賊船」が娼婦の隠喩として使われることと、メナエクス B とエロティウムがやりとりする言葉の性的な含意については、Marsilio, M. S., “Two ‘Ships’ in the *Menaechmi*”, *Classical World* 92 (1998), 131-59 を参照。

(8) Cf. Gratwick, A. S. (ed.), *Plautus, Menaechmi*, Cambridge, 1993, 23-30; Primmer, A., “Die Handlung der *Menaechmi*” I, *Wiener Studien* 100 (1987), 97-115; II, *ibid.* 101 (1988), 193-222. ギリシアの原作は存在せず、すべてプラウトゥスの創作であるとする考え方については、Stärk, E., *Die Menaechmi des Plautus und kein griechisches Original*, Tübingen, 1989 を参照。

(9) メッセニオ自身、メナエクスBによって女好きであるとも言われている(268)。しかし舞台上ではそのようなところは一切見せない。

(10) Segal, E., “The Menaechmi: Roman Comedy of Errors”, *Yale Classical Studies* 21 (1969), 77-93 は、取り違えのためにひどい目にあい続けるメナエクスAとは対照的に、メナエクスBがエロティウムの快樂の家で非日常的で不法でさえある楽しみを安全な立場で享受するのは、喜劇のもつ祝祭性にふさわしいとする。しかし、盗人のようにして快樂と高価な品物を手に入れ、そのあとはあわててエロティウムの家から逃げていく(552-6)メナエクスBからは、観客が本当の解放感を得られたかどうかは疑問である。

(11) 事件の進行にとっては余分な、この966以下のメッセニオの長い独白では、奴隷としては身分をわきまえた、たいへん理性的なことが述べられているのが目立つ。

(12) ローマ化されてはいるが、メナエクスAが集会に参加し、裁判でクリエンスを弁護していることから、彼がエピダムヌスで完全な市民権を得ていることが理解できる。ギリシアの原作でもメナエクスAがエピダムヌスの市民とされていたのか、あるいは、メトイコスのような外国人として扱われていたのかは、ブラウトゥスによる改変の程度とともに知り難い。Cf. Jocelyn, H. D., “Anti-Greek Elements in Plautus’ Menaechmi?”, *Paper of the Liverpool Latin Seminar* 4 (1983), 9f.

(13) Duckworth, G. E., *The Nature of Roman Comedy: A Study in Popular Entertainment*, 2nd ed., Norman, 1994, 325.

(14) 若い夫婦の結婚の危機という場合でも、たとえばギリシア新喜劇のメナンドロス『辻裁判』では、結婚したばかりの夫が自分の妻の不貞の噂を聞き、怒って家を出てしまうが、周囲の人々の助けや偶然によって真実が明らかになり、妻がやはり自分にふさわしい女性であると知り、離婚は回避されるという結末に至る。

(15) Gratwick, op. cit. 29f. は、ギリシアの原作におけるエピダムヌスでのメナエクスAの物語を推定し、そこでは彼は、養子にされることと望まない結婚をさせられることによって、2度囚われの身になったと述べている。